

第一次世界大戦後のウィーンにおけるさまざまな生 ——ギーナ・カウスの長編小説『人生の最前線』(1928)について——

Verschiedene Leben in Wien nach dem ersten Weltkrieg
Zum Roman „Die Front des Lebens“ (1928) von Gina Kaus

田丸 理砂

Risa TAMARU

1. はじめに——ギーナ・カウスの近年の再評価をめぐって

ギーナ・カウス Gina Kaus (1893-1985) は、1920年代から1930年代にドイツ語圏で活躍した作家である。1917年にウィーンで作家活動をスタートさせたカウスは、1939年にヨーロッパを離れアメリカ合衆国に亡命するまでⁱ、戯曲4本、長編小説を6作、伝記『エカテリーナ二世 (Katharina die Große)』(1935)のほか、新聞や雑誌にショートストーリーやアクチュアルな問題を取り上げた批評的エッセイ、書評などを発表し、また作家活動の傍ら、雑誌『母親 (Die Mutter)』ⁱⁱの発行も手掛けている。

2000年以降ドイツ語圏では、ギーナ・カウスの作品およびカウスについての研究書の刊行が相次いでいる。長編小説全6作のうち5作、『恋人たち (Die Verliebten)』(1928/1999)ⁱⁱⁱ、『明日の朝9時に (Morgen um Neun)』(1932/2008)、『クレー姉妹 (Die Schwestern Kleh)』(1933/2013)、2016年には『豪華客船 (Luxusdampfer)』^{iv} (1932/2016) が再出版され、そして本稿で取り上げる『人生の最前線 (Die Front des Lebens)』(1928/2014) は2014年書籍として初刊行された。また散文作品集『抗えないものたち (Die Unwiderstehlichen)』(2000)、『昨日のような今日 (Heute wie Gestern)』^v (2013) も新たに編纂され上梓されている。

とりわけ『人生の最前線』および散文作品集二冊の出版は、これまで書籍の形でまとめられてこなかったがゆえに大変意義深い。

研究書としてはカウスの女性作家としての活動を考察したヒルデガルト・アッツィンガーの『ギーナ・カウス——女性作家と公共圏 (Gina Kaus: Schriftstellerin und Öffentlichkeit)』(2008)、またともにウィーン出身で娯楽文学の(女性)作家とみなされ軽視されてきたカウスとヴィッキイ・バウム Vicki Baum (1888-1960)の作家としての真剣な営為に焦点を当てたシュテファニー・フォン・シュタイネッカー著『くみ使いたちよりも低いものとして』(“A little lower than the Angels”) ^{vi} (2011)、ギーナ・カウスの生涯と彼女の創造活動を総合的にとらえようと試みたヴェロニカ・ホーフエネーダーの『ギーナ・カウスの創造的宇宙 (Der produktive Kosmos der Gina Kaus)』(2013)などが挙げられるだろう。そのほか、ウィーンとも縁の深い同世代の四人の女性作家ギーナ・カウス、ヴィッキイ・バウム、ミレナ・イエセンズカー Milena Jesenská (1896-1944)、アリス・リュール＝ゲアステル Alice Rühle-Gerstel (1894-1943) たちの人生と作品に注目したアンドレア・カボヴィラ著『モデルネにおける女性アイデンティティのスケッチ (Entwürfe weiblicher Identität in der Moderne)』(2004)も興味深い。イエセンズカーとリュール＝ゲアステル、リュール＝ゲアステルとカウスはそれぞれ親交があったが^{vii}、この四人のなかでカウスのみがバウムも含めたほかの三人の女性のいずれとも親しい間柄にあった。

ところでドイツ語圏ではフェミニズム文学研究が本格化した1980年代以降、第一次世界大戦と第二次世界大戦の戦間期の女性作家研究が盛んであるが、ギーナ・カウスは、これらの研究において、ヴィッキイ・バウム、マリールイーゼ・フライサー、イルムガルト・コイン、ガブリエレ・テルギットらのように、研究対象として取り上げられることはほとんどなかった^{viii}。カウスの作

品は娯楽小説／通俗小説に分類されることが多かったが、こうした傾向はバウム、コイン、テルギットにも当てはまるので、その評価ゆえにカウスが看過されてきたということとはできない。それどころかむしろ印刷物の消費財化や大衆化あるいは民主化に特徴づけられるこの時代の女性作家研究は、「娯楽文学」と「高尚文学」の境界そのものを狙上に載せていると断言している。先に挙げた研究書のなかでアツィンガーはギーナ・カウスの研究状況をまとめ、カウスの作品は1980年代から1990年代にかけての亡命文学研究のなかで扱われるようになったと指摘している^{ix}。バウムほどとは言わないまでも、カウスは複数の小説を新聞や雑誌に連載し、そのうちのひとつ『渡航 (Überfahrt)』(1932) (のちに『豪華客船』と改題) は翻訳版も成功を収め^x、1933年には『豪華客船 (Luxury Liner)』というタイトルでアメリカで映画化されている^{xi}。オーストリア、ドイツのみならず、それ以外の地域のドイツ語媒体^{xii}にも数多くのショートストーリーやエッセイなどを発表していたカウスは文字通り当時の人気作家のひとりであった。

以下本論では、第一次世界大戦直後のウィーンを舞台としたギーナ・カウスの長編第一作『人生の最前線』(1928)を取り上げ、ハプスブルク帝国の崩壊とともに没落していくある市民層一家とそれを取り巻く人びとのさまざまな生を、ジェンダー、社会階層および世代に注目しながら分析する。第一次世界大戦での敗北を機に、戦争を生き延びた人びとは、文字通り人生の「最前線／フロント」に臨むこととなる。そして本論の最後では、なぜカウスが、1920年代、30年代の活躍にもかかわらず、他の作家と比べ作品の評価が遅れたのかについてもあわせて考察してみたい。

2. 『人生の最前線』の成立の背景とあらすじ

カウスは自伝『ウィーンからハリウッドへ』のなかで、彼女の

人生に決定的な影響を与えた二人の男性の名を挙げている。ひとり、彼女の二番目の夫、作家で精神分析家のオットー・カウス Otto Kaus を介して知り合った心理学者アルフレート・アドラー Alfred Adler (1870-1937)、そしてもうひとりはそのアドラーに紹介されたウィーンの『労働者新聞 (Arbeiter-Zeitung)』の編集長のフリードリヒ・アウステルリッツ Friedrich Austerlitz (1862-1931) である。カウスはアウステルリッツをしばしば編集部を訪ねては、政治や文学について語りあい、彼から多くのものを学んだと記している。そして真偽はともかくとして、カウスが持ち込んだ原稿はすべて、アウステルリッツは掲載してくれたという^{xiii}。小説『人生の最前線』はアウステルリッツの『労働者新聞』に1928年9月23日から12月14日まで81回にわたって連載された^{xiv}。

さてここで『人生の最前線』のあらすじを述べておこう。なおあらかじめ断っておくが、本稿において登場人物に言及する場合、作品に即して姓あるいは名を使用する。

1918年、第一次世界大戦終戦直前のウィーン。レナーテ・エーベンシュタイン (40歳) は2年前に夫を亡くし、息子と娘とウィーン市内の高級住宅街ヒーツィングの邸宅に暮らしていた。その息子エトガーも6か月前から出征していた。エーベンシュタイン家はかつて裕福な生活を送っていたが、体面は取り繕ってはいるものの、今では家計は火の車である。レナーテは、夫の主治医だった年下の医師ヴァルター・レーネルト (34歳) と夫の生前中から愛人関係にあり、二人のどら娘 (マリア)、どら息子 (エトガー) は、母親から金をせびり、自堕落な生活を送っている。彼ら／彼女らはいかにも世紀転換期のウィーンを舞台にした小説に出てきそうな登場人物たちといえるだろう。

ところでレナーテも彼女の愛人レーネルトも実のところ、互い

に相手に対しての思いは冷めており、惰性で関係が続いているにすぎなかった。しかもレーネルトは同僚の若い新人女性医師マルタに恋をしていた。他人に依存して生きていくことしか頭にないレナーテは、かつて夫に仕えていた^{xv}彼女を崇拜する、今は時流に乗り金持ちに成り上がった老シュティアスニィを軽蔑しながらも、経済力のある彼とレーネルトの間で心が揺れている。

やがて戦争が終わりエトガーが戦地から戻ってくる。彼は世の中の変化についていけず、自暴自棄になり厭世的な生活を送る一方で、家族のなかの唯一の男性という責任感に押しつぶされそうになっている。エトガーは家族を養うために株式取引に手を出すものの、ことごとく失敗し、最後には莫大な借金をかかえることとなる。娘のマリアは以前は画家を目指していたが、現在は目標を失い、始終恋人を換えては、夜な夜な遊び歩いている。彼女はうわべばかりを気に掛ける母のことが好きになれず、二人は衝突を繰り返す。

一方、レーネルトの恋人のマルタは、社会主義思想に惹かれ、医師として貧しい人びとに身を捧げるつもりでいた。マルタは、彼女に愛を打ち明けながらも、レナーテとの関係を断ち切れずにいる優柔不断なレーネルトの態度に耐え切れず、ある晩レナーテに対する激しい嫉妬に駆られ、レーネルトを探し、雨の降りしきる中、レナーテの屋敷を訪ねる。が、けっきょく彼女は留守で、代わりにマルタの相手をした娘のマリアとの間に不思議な友情が芽生える。

物語の最後にマリアとマルタは大きな決心を下す。マリアは大金持ちで祖父ほど年上のシュティアスニィとの結婚を決意し、マルタは希望を抱き、ひとりで社会主義国ソビエトに旅立つ。

3. 他人に依存する女、決断できない男——レナーテとレーネルト レナーテ・エーベンシュタインが自宅で催したパーティが間も

なくお開きというところで、物語は始まる。最後まで客として残っているのは彼女の長年の愛人レーネルトである。レーネルトの視点から語られる第1章、第2章では、彼女は彼から頻繁に送られてくる熱烈な恋文に辟易している様子が描き出されている。しかし第3章で語りのパースペクティヴがレーネルトへと一転すると、実はレーネルトのほうもレーネルトへの思いはすっかり冷めており、そしてそもそも質素をよしとする彼は、彼女の周りの華やかな世界に嫌悪を抱いていることも明らかになる。彼がレーネルトとの関係を断たないのは、それどころか長い情熱的な手紙を書くのは、「戦争のさなかに夫を亡くし財産の維持も危機的状況にある、40歳のレーネルトが愛にも裏切られたら、三重に傷つくにちがいない」(26)^{xvi}と彼が勝手に思い込んでいるからである。なお『人生の最前線』では、それぞれの章で中心となる登場人物へと語りのパースペクティヴは移動していくが、こうした手法は、4人の登場人物の視点からそれぞれが捉えた恋愛が描出されるカウスの第二作『恋人たち』(1928)でより意識的に用いられている。

3.1. レナーテ

ウィーンから約20km離れた小さな町トラウキルヒェンの小市民階層出身のレーネルトは、上昇志向が強く、虚栄心の強い女性である。使用人を次々解雇し、足りなくなった調度品の補充もできず、衣類の新調どころか下着も何度も繕わなければならないほど家計が逼迫していても、体面を保つために彼女は人びとを自宅に招いては、女主人ぶりを発揮する(ただしディナーを用意する余裕はなく、ディナー後の軽食であるのだけれども)。彼女は若さを保つためにあらゆる努力を怠らず、20年前から数か月ごとに、「筋力がつく」「血の巡りがよくなる」「毛穴が開閉する」などと聞いては、新しい美容術を試している(134f.)。そんな彼女が何よりも恐れているのは「老い」である。ある時ただひとりの姉が卒中

に襲われ重体という知らせを受けて、姉の住むトラウキルヒェンに駆け付けたレナーテは、身に迫る「老い」を実感する。

そこにこそ隠された苦痛の根源があった。すなわち彼女の姉、彼女と同世代が、死の淵にいたのだ。これは迫りくる敵からの恐ろしい警告ではなかったか。レナーテは死ではなく、ただ老いだけを恐れ、老いを免れるために死んでもよいと思うこともしばしばだった。もしも姉が今晚死ねば、彼女は半年もの間、黒しか着られなくなってしまう、夜には映えるけれど、昼間には残酷な色だった。シンプルな黒のドレス姿の娘の MARIA は人びとを魅了するだろうが、彼女は、姉が卒中に襲われたのだから、もっと老けて見えるだろう。(161f.)

危篤の姉を目の当たりにしても、レナーテは姉の死よりも、喪服をまとった際のみずからの周囲への効果ばかりを気に掛ける。レナーテの生活および人生は彼女の外見にかかっており、またそこにこそ彼女は自らの価値を見いだしている。しかしながら彼女のこうした生き方を一概に批判することはできない。女性の人生に選択肢が結婚以外にそう多くなかった時代に、レナーテはその外見ゆえに、彼女の嫌悪する小市民的雰囲気から抜け出し、資産家のエーベンシュタインと結婚し、夫の生前中は贅沢三昧の生活を送ることができたのである。画家を志す MARIA や、レーネルトの恋人の医師マルタのような道は、40歳のレナーテにはそもそも拓かれていなかった。それゆえ彼女の華やかな生活の基盤が揺らぎ始めると、彼女はふたたびその外見を武器に事態を好転させようと試みる。生活のために老シュティアスニィとの結婚を決意し、美しく着飾って彼を迎えるのである。彼女の考える人生の成功と失敗は、彼女が他人から受ける評価に依存している。そしてレナーテは依存することに彼女の力を存分に発揮する。一方、こうした

母レナーテの生き方に対し、若い世代の娘のマリアは否定的である。マリアはレーネルトと彼の恋人マリアと三人で話しているときに、母親のやることなすこと「サロンの生ぬるく」、悪い人ではないが「心の欲しているものと虚栄心を履き違えている」と言い、「彼女は自分に残された唯一のものが老いゆく身体であるのが露呈することだけを恐れおののいている」と批判する（264）。

ところで登場人物を描き出すカウスの筆致は非常に冷静である。レナーテ、レーネルト、マリア、マルタ、エトガー（レナーテの息子）の間でパースペクティヴが移動して語られる本作では、ある人物が多角的に捉えられることで、彼ら／彼女らの実像が明確化するというより、むしろ彼ら／彼女らの主観的世界の疑わしさが強調されることとなる。たとえばレナーテについていえば、前述のように、彼女が鬱陶しく思っていたレーネルトには実は恋人が存在し、彼女の必死の努力にもかかわらず、レーネルトは彼女の老いへの抵抗を気の毒に眺めている。また自分のことをずっと思い続けていると信じ込んでいたシュティアスニイは、端から（少なくとも物語の最初から）彼女に関心はなかった。マリアとの結婚の許しを得るために母レナーテを訪ねたシュティアスニイから、彼がかねてよりマリアに思いを募らせていたことが告げられる（もちろんレナーテは自身がシュティアスニイと結婚する気になっていたことは誰にも言わない）。このことはレナーテにとって二重の意味で屈辱といえよう。ひとつは彼女が見下していたシュティアスニイはレナーテのことなど歯牙にもかけていなかったこと、もうひとつは老シュティアスニイとマリアの結婚はマリアの「若さ」の勝利とも見て取れるからである。

3.2. レーネルト

セントバーナードにも似た風貌の大男のレーネルトは決断できない男である。マルタのことを好きになりながらもレナーテとの

関係を断ち切れず、彼女に情熱たっぷりの嘘八百の恋文を送る。ようやくの思いでマルタにレナーテとの関係を打ち明け、彼女のことを愛していないだけでなく、そのライフスタイルに違和感を覚えると言いながらも、「恐ろしいのは、僕がいなければ彼女の世界が少しずつ失われていくことだ。というのも彼女の財産は大変な状態にあるから。(略)彼女が人間への信頼、新しい生活を築いていく力をもはやもてなくなってしまうのではないか」と思うと、彼曰く、レナーテに本当のことが言えないとか。それどころか、マルタに「きみが裁判官だ。きみの判決どおりにするべきなんだ。ひょっとするときみは、きみに責任を負わせるなんて、ぼくのことを卑劣だと思うかもしれないが、いずれにせよ、ぼくは、きみの言葉すべてを神の裁き以外の何物ではないと思うだろうから」(44-46)とみずからの決断を避ける。これに対し、マルタからレナーテをだまし続けることは不誠実だと反論され、レーネルトはレナーテへの告白を覚悟するも、何かと口実を見つけては、ずるずるとそれを先延ばしにする。そしていよいよ告げる段になった彼はレナーテに次のように言う。

「ぼくたちには共通の将来像が欠けている。(略)それぞれ相手から離れていては愛しあうことはできない。愛とは第三の何かへの共通の意志だ。それは子どもをもつことのように単純なことかもしれないし、理想のような崇高なものなのかもしれない。つまり空虚な日常とともに闘うこと、ぼくたちの愛がかつてそうだったように。」

彼はぎょっとして話すのをやめた。実際、もうこれで全部言った、と彼は思った。(89)

彼はマルタの名も他に好きな人がいることも打ち明けず、曖昧模糊とした表現を使い、それで言わなければならないことは言っ

たと自分に都合よく納得する。この告白後も彼はこれまで通り、週に数度はレナーテの家で食事をとり、親しい人たちと過ごすのが一般的なクリスマスの晩も、マルタとではなく、エーベンシュタイン家で過ごすことを優先させる。8年前からずっとそうしてきたのだからいまさら断ったら、無礼だというのがレーネルト流の理由である (114)。

このように決断できないレーネルトのことを MARIA は、マルタに対してこう評する。この時マルタはレーネルトとともにロシアに行くことを計画していた。

「でもヴァルターおじさん (*レーネルトのこと) はけっしてロシアには行かないでしょう。あなたは本当に驚いているの。でもね彼は絶対にこの町もこの生活からも離れやしないでしょうよ。だって彼にはこうしたことを決断することなどまったく不可能なのだから。ここに彼を引き留める具体的なにかがあるとは思わないし、ひょっとしたらせいぜい病院の小さな部屋といつもの道を通って病院の職員食堂やカフェへの行くことくらい。だけど彼がこの部屋を別な部屋と、この道を別な道と換えるとは思えない。もしも交換できれば、もっと多くのことが得られるのはわかっているけれど。彼は自己犠牲するまでに高潔で勤勉で、あなたの高貴で素晴らしい計画にかならずや感激していることでしょう。けれどそれでも彼をそこへ向かわせることはできない。というのも彼は冒険家とは正反対だから。彼は不慣れな状況にしり込みし、うまくいかないことを恐れ、大仰なほど小心ぶりを発揮する。……」 (265f.)

さらに MARIA は、レーネルトはロシアでの仕事を想像して熱中しながらも、「彼にとどまることを強いる、より高貴で無私無欲

な動機」によって、最後の最後でロシアへの出発を諦めるだろうと断言する (266)。

結局、物語ではレーネルトは、決断することを迫るマルタではなく、好きではないがマリアとシュティアスニイの結婚を聞いて打ちひしがれ、レーネルトに本気ですがりつくレナーテのもとにとどまることが示唆されている。

……彼女が最後に「今またあなたまでがわたしのもとを去っていくなら、もうわたしは生きていけない」と言ったとき、こうして彼女は今度こそ真実を語ったのだった。このことはレーネルトにもわかっていた。そして彼は殺人者ではなかった。(299)

4. 第一次世界大戦での敗北と男性性のゆらぎ——エトガー

本書第7章冒頭で第一次世界大戦の終結が告げられ、エトガー(23歳)は、6か月ぶりに戦地からウィーンに戻ってくる。この間にハプスブルク帝国は崩壊し、ウィーンは「赤いウィーン」へと変貌しつつあった。

6週間後に戦争は敗北して終わり、皇帝は退位した。社会主義者たちが国政の実権を握り、すべてのブルジョアたちを震え上がらせた。彼らは民衆の怒りを抑えたいと思っているのか、そしてそれにも彼らは成功するのだろうか。参謀本部からの単調な報告の時代は過去のものとなり、そら恐ろしいうわさが殺戮の警告のように町中を駆けめぐった。脅迫のない日も、心休まる夜もなかった。金持ちは陸に上がった魚のように暴れまわっていた。(56)

エトガー(元中尉)が従卒だったマルティンを連れて久しぶり

に我が家に帰宅すると、彼のことを知らない新しい守衛につかまり、大騒ぎになる。砲兵隊の制服を着た二人は髭も剃っておらず、薄汚れた姿をしていた。その際、エトガーは手に光るものを握り、士官帽も被らず「幽霊がその頭を支えるかのように、奇妙にもその帽子を腕の下に抱えて」(57) いて、そのことが彼の姿をより一層みすばらしいものにしていった。

エトガーがそのような格好をしていたのは、駅でそこに集まっていた人たちに階級を示す襟の星と士官の帽章を引きちぎられたからである(63)。国のために戦ったにもかかわらず、敗戦によりその国民から屈辱的な扱いを受け、また労働者が声を上げるのを目の当たりにして、市民層出身のエトガーは、彼の拠って立つ確固たる基盤が大きく揺らいでいることを知る。実際、ようやく戻った家の家計は傾き、特権階級というにはほど遠かった。けれども一家のただ一人の男性として家族を支えなければという、彼の實力には不釣り合いな男性的優越感が次々と彼を誤った判断へと導いていく。こうしたエトガーの人物像について、ホーフェネーダーは次のように指摘している。

エトガーという人物は個人心理学における神経症のあるタイプの人間の性格描写である。そのタイプは常に自分への疑念に取りつかれて、途方もない野心を抱き、それゆえかならずや失敗するのである^{xvii}。

エトガーは妹 MARIA から軽蔑されることを何よりも恐れ、彼女より自分のほうが優れていると周囲の人に認めてもらうこと、家族から正当に評価されることを強く望んでいる。エーベンシュタイン家の唯一の男であるがゆえに彼は家族を没落から救いたいと思うが、甘やかされて育ってきたエトガーには、汗水たらして働くという発想はなく、父親が残してくれた遺産をうまく運用し

て一家の困難を乗り越えることばかり考えている。そんな彼は、仲介者に足元を見られ父親の遺産の家を安く買ったたかれ、外国為替や株取引にも失敗し、結局、山のような借金を背負うはめになる。ちなみにこうした生ぬるいエトガーのメンタリティを、マリアは母親も自分も含めて自戒的に「金利生活者の心理 (Rentnerpsychologie)」(218) と名付けている。

ところで劣等感に苛まれるエトガーが物語中ただ一度だけ優越感を覚えるのは、ジェンダー的にも社会階層的にも彼より弱い立場にある小間使いのロージィを強姦し、全能感に浸る場面である。

エトガーはその娘と同じくらい不意をつかれた気分だった。はじめて彼は情熱にまかせてつい悪ふざけをしてしまった若者のように感じた。酒は一滴も飲んでいなかったが、この酩酊は彼に力と喜びの感情を取り戻させた。(207)

もっとも著者カウスの描く女性はお坊ちゃんのエトガーよりずっとパワーに満ちている。最初は抵抗していたものの、彼からのキスに彼にすっかり夢中になったロージィは、エトガーが秘密裏に進めていた老シュティアスニィの娘エルナとの駆け落ち計画を嗅ぎ付け、それをぶち壊しにする。こうしてエトガーは弱者であるはずのロージィからもしっぺ返しを食うのである。エトガーはますます募る劣等感から、しだいに今自分がこのような不本意な状況にいるのは労働者とユダヤ人のせいだと思い込むようになり、反ユダヤ、反社会主義を標榜する怪しい団体との結びつきを強めていく。彼は、時流に乗った成功者である昔からの知り合いユダヤ人シュティアスニィを憎悪し、彼への攻撃を仲間を持ち掛けるものの、実はシュティアスニィは団体の影の支援者であることを知らされ、最後の砦だと思っていた仲間にも裏切られた気分になる。人生に絶望したエトガーはピストル自殺を試みる。しかし右

目は失うが未遂に終わり、つまり彼の意に反して死に損ない、おそらく一番見たくない妹マリアと老シュティアスニの結婚式に無様な姿で参列するはめになる。

一方、同じ日の同じ病院に同様に自殺を図ったマルティンも運ばれてきた。元従卒のマルティンは、労働者として働いていたが、こちらは栄養状態も悪く体力もなく（彼はかつて結核に罹患していた）、搬送されて間もなく命を落としてしまう。彼の妻は夫の出征中に、ちがう男性と関係ができ、マルティンと住んでいた家に家族同然に住んでいた。子どももその男性になつき、彼は家族も養っていた。マルティンにはもはや帰る場所がなかった。彼は男だけが兵士として駆り出された国のための戦争によって、プライヴェートな世界での男性的地位を失い、またその戦争での敗北によって結果として公的な場でも男性性が貶められることとなった。

こうして第一次世界大戦を無傷で生き延びた二人の元兵士は復員後の人生／「人生の最前線」においてひとりには命を落とし、もうひとりには瀕死の重傷を負う。

5. 新しい生き方を求めて——マリアとマルタ

さてこれまで取り上げてきた登場人物と比べ、レナーテの娘マリアとレーネルトの恋人マルタは、試行錯誤しながらも新しい生き方を求める若い女性として好意的に描かれている。

レーネルトは作品中、マルタとマリアの両方をよく知る唯一の登場人物であるが、彼はこのまったくタイプの異なる二人に、何かしらの共通点を感じている。

レーネルトは、マルタとマリアにはある意味、似通ったところがあると思い、それをもっと詳しく定義したいと思っていた。このふたりの若い女性には、たとえばそれはレナーテには欠けているのだけれども、何かしらの共通点があった。

彼女たちはおそらく、レナーテが娘とよりもずっとよく分かりあえるだろう。この新しい世代の彼女たちの心を奪っているのは、たとえ方向性は異なっていると看做しても、何事につけもとことん突き詰める、ある種のラディカリズムであった。それが一人を社会主義者に、もう一人を筋金入りの個人主義者にしたのだ。それは一方には誰かのために身をささげること強い、他方にはみずからのためのいけにえを求めさせた。いつも彼女たちは追い立てられているかのように何かを求めていて、もちろんマルタとマリアが求めるものは同じではないのだが、それはいずれにせよ、よくある女性の生き方ではなかった。レナーテはつねに彼女がいるところで、できるだけ居心地よくしようと心掛けた。しかしながらこの若いふたりは、いつもどこかへの途上にあつた。どこに向かっているのか、それはおそらく彼女たち自身にも分からないし、そのための答えなどひょっとしたら全然ないのかもしれない。けれどふたりにはある目的があつた。それぞれ別ではあるが、男性の手から幸せと生存を受けることではけっしてない。(121)

それではここでマルタとマリアについて詳しく見てきたい。

5.1. マルタ

新人医師マルタについては作品中、次のように語られている。なおマルタの姓や年齢には言及がないが、大学を出て間もない新人医師という設定から考えると20代前半であることが推測される。

マルタは裕福な保守的カトリック家庭の出身で、大学進学のためには激しく闘わねばならず、医師になったことで家族とは断絶状態にあると言われていた。彼女の生活はひどく質素で、おそらく本当に自分の給料だけでやりくりしているのだ

ろうということだった。彼女は病院で食べ、病院で寝、もっぱら白衣姿だったが、髪はいつも入念に櫛ですかれ、肌や手の手入れも怠らず、バチスト地の襟と靴には彼女がけっしておしゃれに関心がないわけでないことが表れていた。誰に対しても毅然とふるまうさま、その自然な屈託のなさは、彼女に高貴で豊かな雰囲気を与えていた。患者たちはしばしば彼女の前で当惑し、病院の従業員たちは彼女のことを、理由は不明なのだが、申し合わせたかのように、「伯爵令嬢」と呼んでいた。(27)

この引用からもわかるように、家族の反対を押し切って医師を志したマルタの育ちのよさは、彼女の立ち居振る舞いやさりげないおしゃれに窺われる。

物語の中でマルタは、さまざまに思い悩み失敗を繰り返しながらも、人びとのために献身するという理想を追い求める女性として描き出されている。恋人レーネルトは彼女のことを天使や聖女のように理想化するが、マルタはけっして完璧な人間ではない。たとえば3.2.で触れたレーネルトがエーベンシュタイン家でのクリスマス・ディナーをマルタと過ごすことよりも優先させる場面では、二人はそのことが原因で言い合いになり、その後、すっかり気落ちしたマルタは、前々から個人的に準備し、楽しみにしていた入院中の子どもたちへのクリスマスプレゼント贈呈イベントも、けっきょく、おざなりにしてしまう。またレナーテのことは愛していないと言いながらもレーネルトがこれまで通り彼女の訪問を続けるのに対し、彼の前では平然とふるまいつつも、マルタはしだいにレナーテの影に苦しめられるようになる。彼女への嫉妬に駆られたマルタ（彼女はレナーテの重体の姉の診察のためにレーネルトが急遽病院から連れ出されたことを知らない）は、レナーテとレーネルトは一緒にいるところを押さえようと、夜遅く、

徒歩で（石炭不足で路面電車の運行がストップしていた）雨の降りしきる中、ずぶぬれになりながら、ヒーティングのアーベンシュタイン家を訪ねる。しかし二人には会うことができず、代わりにちょうど出先から帰宅したマリアと出くわし、これが彼女たちにとって大切な出会いとなる。

マリアは嫉妬心からアーベンシュタイン家を訪ねた自分に驚き、二度とこんなことは繰り返してはならないと決意する。そして最後には彼女を神聖視する優柔不断なレーネルトに別れを告げ、貧しい子どものために尽くしたいと希望に胸を膨らませて、新しい社会主義国家ソビエトへと旅立つ。

5.2. マリア

かつては絵を描くことにすべてを捧げていたマリアは、人びとがみな生きることに精一杯な時代に、芸術を志すことの意味を見失っていた。今や彼女は多くの同世代の娘のように、着飾り男友だちと遊びまわっている。子どものころから自意識が強く非常に野心家だったマリアのこうした変化を母親のレナーテは理解できない。レーネルトがある時こうしたマリアの様子をマルタに話すと（この時点で彼女たちはまだ出会っていない）、「かわいそうな人、苦しんでいるに違いない」とマルタはマリアに対して同情を示す。するとレーネルトは「彼女に何が欠けているっていうのか。（略）美人だし、金持ちだし、すべてにおいて成功を取めている。それともきみは彼女が失恋したとでも思っているの」（119）。と反論する。これに対しマルタは、ふたたび次のように述べる。

「そんなことはもちろん知らない。だけどいずれにせよ彼女は何かに鞭打たれているかのよう。彼女を何かが駆り立てている。好き好んで自由意思でそんなふうになめちゃくちゃにふるまう人はいないのだから」（120）

マリアはいわば芸術における求道者である。マリアの夢のシーンで始まる第13章ではこうしたマリアの芸術との葛藤が扱われている。

「マイスターはわたしのところに泊まってくださるのでしょうか」とマリアはたずねた。

「その方は日曜日に彼の赤い指輪をはめた人のところにお泊りになるでしょう」と修道服の男は答え、姿を消した。

わたしはその指輪を手に入れなければならない、とマリアは思った、わたしは世界中を探さなければならない、必要とあれば力づくでも、策略を用いても。わたしはそれを手に入れなければならない、というのもすべてがそれにかかっているから。もしもどこでそれを始めればいいかだけでもひらめいたら。世界はこんなにも大きいのに、日曜日まではほとんど時間がない。彼女には何も思いつかず、目覚めると絶望的な気分になった。(137)

夢の中で言及されるマイスターとは彼女の導き手、赤い指輪とはそれを結びつける標ということだろう。彼女は高貴な目的のためにみずからを捧げたいと思っている。マリアは榮譽と名声を得るために腕のいい画家になりたいわけではなく、金持ち連中の気晴らしとしての芸術には関心がなく、ロシア革命に賛同した芸術家のように政治的理念と芸術を結び付けるつもりもなかった。彼女が目指していたのは絶対的な何かと結びつくことである。けれどもそれが不可能なら彼女はむしろ死を選ぶという。そして彼女は祖父ほど年の離れた、65歳の大金持ちのシュティアスニイとの結婚を決断し、それを彼女は「自殺 (Selbstmord)」の一つの在り方という。

5.3. マリアとマルタ

マリアとマルタという名はドイツ語圏では取り立てて珍しい名前ではないが、この組み合わせは新約聖書「ルカによる福音書」10. 38-42の「マリアとマルタ」の話の思い起こさせる。

一行が歩いていくうち、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足もとに座っていて、その話に聞き入っていた。マルタは、いろいろなもてなしのためにせわしく立ち働いていたが、そばに近寄って言った。「主よ、わたしの姉妹はわたしにだけもてなしをさせていますが、なんともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」主はお答えになった。「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」^{xviii}

新約聖書の「マリアとマルタ」の解釈については深入りはしないが、少なくともここからは他者に尽くすマルタと神の言葉に耳を傾けるマリアの対照的なふたりの女性の姿が読み取れるだろう。本作における芸術との絶対的な結びつきを求めるマリアと他者のために身を捧げようと医師になったマルタは、おそらくこの「マリアとマルタ」を下敷きにしていると思われる。以下は物語の最後、彼女たちがともに新天地へと旅立つ直前の場面である。

そして突然ふたりは同じ考えを抱いた。これから無私に貧しい人や苦しんでいる人たちのために献身しようというマルタが、贅沢と無責任ざんまいの生活を送ることになるマリアを聖女の子孫と呼ぶのは、奇妙だけれど、もっともだと。け

れどこの考えを彼女たちはけっして口に出しては言わなかった。(314)

求める道はそれぞれ異なっているが、彼女たちはたがいの生き方を認めあっている。聖書の「マリアとマルタ」が姉妹であるかのように、彼女たちの心は深いところで繋がっている。ふたりの別れ際にマルタはマリアを抱きしめて言う。

「あなたに初めて会った時から、ずっとキスすることを願っていた」と彼女は顔を輝かせて言った。合唱が鳴りひびくなか、彼女たちはキスをし、すべての苦悩を解き放ち、夕べの風にゆだねた。そして彼女たちはたがいに別れの握手をした。

「私もあなたに言いたいことがあるの」とマリアはそのかすれた声で言った。「わたしのこれまでの人生に登場したすべての人のなかで、あなたは唯一、出会った瞬間から尊敬できる人だった」(315)

キスは彼女たちの強い結びつきの証である。そして彼女たちはそれぞれの道へと進んでいく。

*

さてカウスのすべての長編小説において、「恋愛」「結婚」「家族」「女性」は重要なテーマとなっており、これは『人生の最前線』にも当てはまる。とはいえこの作品では、かつての主人エーベンシュタイン家の娘、しかも孫のような美しいマリアと結婚する老シュティアスニの以外、「恋愛」「結婚」によって幸福になった登場人物はいない。そのシュティアスニにしても結婚後幸せになるかはわからない。レナーテは夫の生前からレーネルトと不倫関係にあり、マリアは人生に絶望してシュティアスニとの結婚

を決断し、復員したマルティンは戦争後の生活に絶望し自殺を図る。そしてレナーテとレーネルトのペアが一緒にいるのは、もう他に誰も残っていないからという消極的な理由による。にもかかわらず物語の終わりに漂うそこはかとなない明るい雰囲気は、マリアとマルタという若い女性たちに負っている。たとえマリアが諦めからシュティアスニィとの結婚を決意したとしても、物語の登場人物のなかで過去の価値にすぎることなく、みずからの生き方を求めているのは彼女たちだけなのである。そのポジティブなエネルギーが最後に読者に余韻として残される。

カウスがこうしたたがいに尊敬しあう対照的なふたりの若い女性像を作り上げた背後にはカウス自身の抱える矛盾が投影されていると推測される。

1913年20歳で宝石商の息子と結婚したものの、2年後に夫を第一次世界大戦で失ったカウスは、亡夫の親戚筋のウィーンの大実業家ヨーゼフ・クランツに見初められ、1916年に30歳年上のクランツの養女という名目の愛人となった^{xi}。クランツのもとで贅沢な生活を送る一方、カウスはそのころからウィーンのカフェに通い、フランツ・ブライ、ローベルト・ムジール、ヘルマン・ブロッホ、フランツ・ヴェルフエル、ミレナ・イエセンスカー、その夫のエルンスト・ポラックらの作家たちとの交友が始まる。こうしたなか彼ら／彼女らの影響を受け、元々貧しい出であったカウスは共産主義に関心を高めていく。彼女が二番目の夫で共産主義の作家のオットー・カウスと知り合ったのも、こうした文学者の出入りしていたカフェである。そしてクランツとの関係の続いていた1917年には共産主義の雑誌『ソビエト (Sowiet)』にカウスがペンネームで書いたブルジョアジー批判のエッセイが発表され、のちに同誌には彼女の最初の短編小説も掲載されている^{xx}。またオットー・カウスとの結婚後、第2章の冒頭で触れたアードラーとの出会いがきっかけとなり、カウスはアードラー心理学にもと

づき子どもの成長、心理、教育を主要テーマとした雑誌『母親』の編集をみずから手がけている^{xxi}。このようにカウス自身のなかに、自由になるために年上の金持ちと一緒にすることを割り切るマリアの要素と社会的不公正と闘うマルタ的要素が存在していたと言えるのである。

＊ ＊

最後にカウスの作品が最近になるまできちんと扱われてこなかった理由について少しだけ考えてみたい。まだ考察半ばなので拙速に結論づけることはしないが、以下の二点だけは強調しておきたい。まず第一に第二次世界大戦後にカウスがほとんど作家活動を停止するとともにヨーロッパとの関係が希薄になっていったこと。カウスは合衆国に亡命後、家族を養うため、ハリウッドの映画業界でシナリオ作家として働いた。当時合衆国に渡った多くのドイツ語圏出身の作家たちが同様の方法で生活の糧を得ることを望んだが、成功した人はほとんどおらず、カウスはその例外とっていい。ただその代償として、彼女はその後、文学的創作活動からは遠ざかることとなった^{xxii}。

もう一つの理由として考えられるのは、ギーナ・カウスの作品に認められるウィーンという背景との密接な結びつきである。長編小説のうち4作(『人生の最前線』『明日の朝9時に』『クレー姉妹』『絹をまとった悪魔』)はウィーンを舞台としているだけでなく、カウスの作品からは同時代のウィーンの雰囲気の色濃く感じとれる。たとえばカウスの登場人物の造形には「赤いウィーン」と呼ばれた当時のウィーン市政を担う社会民主党の教育政策にも影響を与えたアドラー心理学が深くかかわっており、また『人生の最前線』においてエーベンシュタイン家とは対照的にシュティアスニィがひと財産を築く背景にはハプスブルク帝国の崩壊後のチェコスロヴァキアの独立がある。ちなみに世界的に成功を取めた『豪華客船』はヨーロッパからアメリカに向かう客船という無国籍的

空間で繰り広げられる物語であり、この点でバウムの大ヒット作『ホテルの人びと』とも設定が似ている^{xxiii}。

これまで戦間期のドイツ語圏の女性作家の作品を考察する際、わたしたちはおのずと急速にモダンな大都市へと変貌を遂げたベルリンという町と結び付けてきた。都会、ホワイトカラー、ウィークエンド、マスメディアの急速な発展、スピード、そして「新しい女 (Die Neue Frau)」といった新即物主義的特徴からは大都市ベルリンが容易に連想される。また筆者も含め、これらの作家やその作品を扱う際、ドイツを意味する「ワイマール共和国」あるいは「ワイマール時代」という表現を枕詞のように使用してきた^{xxiv}。それはまた過去との断絶をイメージさせる名前でもあった。もちろん先にも触れたように、カウスの作品はドイツ語圏の様々な地域で読まれていたし、ドイツ語圏のマスメディアの中心地であるベルリンには彼女もしばしば滞在していた。またバウム同様、カウスはベルリンの大手出版社ウルシュタインのさまざまな新聞雑誌に小品や連載小説を執筆、同社や同社系列の出版社から小説や戯曲も上梓している。

しかしながら管見ではあるが、カウスの作品に拭いがたく染みこんだその文脈としてのウィーンが「ワイマール共和国時代の女性作家」として彼女を捉えるのを難しくしているのではないか。というのもワイマール時代のベルリンが引き合いに出される際には、戦間期ドイツのドイツ的社会状況とともに、ベルリンの示すモダン都市やグローバル化した世界が普遍的現象として語られる傾向があるからだ。これに対しカウスの作品は、本論で扱った『人生の最前線』にも見て取れるように、その背景にウィーンの個別的／特殊的状況が特徴的であり、それこそがまたカウスの作品の魅力を作り上げている。

Literatur

Gina Kausの作品

- Kaus, Gina (1928/2014): *Die Front des Lebens*. Mit einem Vorwort von Marlene Streeruwitz. Hg. und mit einem Nachwort von Veronika Hofeneder. Wien: Metroverlag. 2014
- Kaus, Gina (1933/1991): *Die Schwestern Kleh*. Roman. Mit einem Nachwort von Sibylle Mulot-Déri. Frankfurt a. M; Berlin: Ullstein. 1991.
- Kaus, Gina (1933/2013): *Die Schwestern Kleh*. Roman. Mit einem Nachwort von Edda Ziegler. Gräfelfing / Hamburg: edtion fünf. Verlag Silke Weiniger. 2013.
- Kaus, Gina (2000): *Die Unwiderstehlichen*. Kleine Prosa. Hg. und mit einem Nachwort versehen von Hartmut Vollmer. Oldenburg: Igel Verlag Literatur. 2000.
- Kaus, Gina (1928/1999): *Die Verliebten*. Roman. Hg. und mit einem Nachwort versehen von Hartmut Vollmer. Oldenburg: Igel Verlag Literatur. 1999.
- Kaus, Gina (2013): *Heute wie Gestern. Gebrochene Herzen – Moderne Frauen – Mutige Kinder*. Kleine Prosa. Ausgewählt, herausgegeben und mit einem Nachwort versehen von Veronika Hofeneder. Hildesheim; Zürich; New York: Georg Olms Verlag. 2013.
- Kaus, Gina (1935/1995): *Katharina die Große*. Biographie. München: Langen Müller. 1995.
- Kaus, Gina (1932/2016): *Luxusdampfer*. Mit einem Nachwort von Veronika Hofeneder. Wien: Milena Verlag. 2016.
- Kaus, Gina (1932/2008): *Morgen um Neun*. Roman. Mit einem Nachwort von Gerhard Bauer. Hildesheim; Zürich; New York: Georg Olms Verlag. 2008.
- Kaus, Gina (1939/40/1992): *Teufel in Seide*. Roman. Mit einem Nachwort von Sibylle Mulot. Frankfurt a. M; Berlin: Ullstein. 1992. *なおこの小説の発表当初のタイトルは『となりの悪魔 (Der Teufel nebenan)』。
- Kaus, Gina (1979/1990): *Von Wien nach Hollywood. Erinnerungen von Gina Kaus*. Neu und mit einem Nachwort versehen von Sibylle Mulot. Frankfurt a. M.: Suhrkamp Taschenbuch Verlag. 1990.

上記以外

- Atzinger, Hildegard (2008): *Gina Kaus: Schriftstellerin und Öffentlichkeit. Zur Stellung einer Schriftstellerin in der literarischen Öffentlichkeit der Zwischenkriegszeit in Österreich und Deutschland*. Frankfurt a.M.: Peter Lang, 2008.
- Capovilla, Andrea (2004): *Entwürfe weiblicher Identität in der Moderne. Milena Jesenská, Vicki Baum, Gina, Kaus, Alice Rühle-Gerstel. Studien zu Leben und Werk*. Oldenburg: Igel Verlag, 2004.
- Hofeneder, Veronika (2013): *Der produktive Kosmos der Gina Kaus. Schriftstellerin – Pädagogin – Revolutionärin*. Hildesheim; Zürich; New York: Georg Olms Verlag, 2013.
- Steinaecker, Stefanie von (2011): *“A little lower than the Angels”. Vicki Baum und Gina Kaus: Schreiben zwischen Anpassung und Anspruch*. Bamberg: University of Bamberg Press, 2011.
- バーバラ・ジェラヴィッチ (1998) 『近代オーストリアの歴史と文化』 矢田俊隆訳 山川出版社 1998.
- W・M・ジョンストン (1986) 『ウィーン精神1』 井上修一他訳 みすず書房 1986.
- 『聖書 新共同訳』 (2004) 日本聖書協会 2004.
- 田口晃 (2008) 『ウィーン—都市の近代』 岩波書店 2008.
- 田丸理砂 (2010) 『髪を切ってベルリンを駆ける』 フェリス女学院大学 2010.
- 田丸理砂 (2013) 「メキシコシティから望むフラチャニの丘」 日本社会文学学会『社会文学』 第37号 2013. 25-36頁。
- 田丸理砂 (2015) 『「女の子」という運動—ワイマール共和国末期のモダンガール』 春風社 2015.
- 増谷英樹 (2016) 『図説ウィーンの歴史』 河出書房新社 2016.

註

- ⁱ オーストリアの社会民主党とも係わりが深く、ユダヤ系でもあったカウスはナチ政権成立以降、ドイツ語圏での作品の発表が困難になった。1933年から1939年までカウスの作品はオランダの亡命出版社アラート・デ・ランゲから出版されている。1938年3月12日（ヒトラーによるオーストリア併合の前日）、カウスは家族とともにツューリヒ経由でパリに

-
- 入り、当地にしばらく滞在するが、1939年9月1日ルアーブル港を出航予定（実際にはドイツ軍のポーランド侵攻の日と重なり、出航は遅れ、乗客は港で足止めされた）のイル・ド・フランス号でニューヨークに向かった。Vgl. Kaus (1979/1990), S.183-185; Hofeneder (2013), S.31-36.
- ii 1924年、カウスは第二子の出産後約1か月で、雑誌『母親』をみずから発刊する。『母親』には、カウスが信奉していたアドラー心理学に基づき、子どもの成長、心理、教育についての記事が掲載されていた。子どもの心理学に注目した本誌は創刊当初は売れ行きも好調だったが、次第に売り上げが減少し、その一方でカウスの小説家としての評価が高まるとともに彼女は雑誌の編集作業への熱意を失い、1925年には雑誌の権利を売却する。Vgl. Kaus (1979/1990), S.118-126.
- iii (1928/1999) という記述の「1929」（=1929年）は初刊行もしくは初出時を示し、「1999」（=1999年）は最近の刊行時を指す。以下も同様であるが、散文作品集には複数の作品が収録されているので、書籍としての刊行時のみをカッコ内に記した。
- iv 『豪華客船 (Luxusdampfer)』のタイトルは元々『渡航 (Überfahrt)』といったが、1937年にオランダの亡命出版社で再刊行されるにあたり、『豪華客船』に変更され、以降は変更後のタイトルで出版されている。
- v 散文作品集『抗えないものたち』と『昨日のような今日』には収録作品に重なりが認められるが、カウスの小品はさまざまな雑誌や新聞で再掲載され、その際に作者本人がタイトルや本文に修正加筆していることもあり、両者の出典元として挙げられている新聞雑誌はかならずしも一致していない。
- vi 新約聖書の英語訳「ヘブル人への手紙」第2章で使用されている語句より。
- vii リューレ＝ゲアステルの作品や彼女とイエSENSカーおよびカウスの関係については、拙論田丸 (2013) を参照していただきたい。
- viii 戦間期の女性作家研究およびこれらの作家については拙書田丸 (2010) および田丸 (2015) を参照していただきたい。
- ix Vgl. Atzinger (2008), S.33f.
- x 『渡航』はアメリカ、イギリス、フランス、イタリアで翻訳されている。Vgl. Kaus (1979/1990), S.148.
- xi Vgl. Kaus (1979/1990), S.149; Hofeneder (2013), S.301.
- xii „Czernowitzer Morgenblatt“ (チェルノヴィッツ、ルーマニア)、„New Yorker Volkszeitung“ (ニューヨーク)、„National-Zeitung“ (バーゼル)、„Pariser Tageszeitung“ (パリ)、„Argentinisches Tageblatt“ (アルゼ

-
- ンチン) など。Vgl. Hofeneder (2013), S.26.
- xiii Vgl. Kaus (1979/1990), S.84-86.
- xiv Vgl. Kaus (1928/2014), S.316.
- xv シュティアスニイはもともと北ボヘミア出身のレナーテの夫、若き日のエーベンシュタインがウィーンに出てくる際に、息子を心配した実業家の両親によって、彼を手助けするように送りこまれた。Vgl. Kaus (1928/2014), S.12.
- xvi 以下『人生の最前線』[Kaus (1928/2014)]からの引用は、()の中にページ数のみ記す。
- xvii Hofeneder (2013), S.179.
- xviii 『聖書 新共同訳』(2004) 127頁。
- xix カウスによれば、これは既婚者のクランツがカウスと正式に同居することを望んだからであり、彼女がクランツの愛人であるのは公然の秘密であった。Vgl. Kaus (1979/1990), S.32.
- xx Vgl. Hofeneder (2013), S.15-17; Kaus (1979/1990), S.22-36.
- xxi Vgl. Hofeneder (2013), S.20; Kaus (1979/1990), S.118-120.
- xxii Vgl. Hofeneder (2013), S.37.
- xxiii バウムの『ホテルの人びと』の空間性については拙書、田丸 (2010) 109-111頁を参照していただきたい。
- xxiv 拙書田丸 (2010) (2015) のほかに、2000年以降にドイツ語圏で出版された戦間期の女性作家の作品についての研究書として、Kerstin Barndt: *Sentiment und Sachlichkeit. Der Roman der Neuen Frau in der Weimarer Republik*. Köln; Weimar; Wien: Böhlau. 2000. や Liane Schüller: *Vom Ernst der Zerstreuung. Schreibende Frauen am Ende der Weimarer Republik: Marieluise Fleißer, Irmgard Keun und Gabriele Tergit*. Bielefeld: Aisthesis Verlag. 2005. などが挙げられる(下線筆者)。